

中高一貫校から見る 中高接続の重要性と課題

— 新課程を契機とした指導の模索 —

中学校の新学習指導要領では、数学や理科など多くの教科で学習内容が増え、授業時数も1年間で35時間、3年間で105時間増える。
新課程の指導を受けてきた生徒を受け入れる高校は、どのような対応が必要なのか。中高一貫校の教師2人に聞いた。

中学校の学習指導要領の改訂ポイント

2012年度に全面实施される中学校の新課程では、選択教科がなくなり（標準授業時数の枠外で開設可能）、「総合的な学習の時間」の時数も減るが、多くの教科では指導内容と授業時数が共に増える。

授業時数が増える教科は、国語、社会、数学、理科、保健体育、外国語で、1〜3年生の3年間の合計授業時数は、1教科あたり35〜105時間増となる。
現行課程に比べ、各学年とも週当たり1コマ増となる計算だ。

考えられる高校への影響と求められる指導

中学校での学習内容と授業時数の増加により、高校入学段階での学力の底上げが期待される半面、学力の二極化が懸念される。また、選択教科がなくなることにより「興味・関心に応じた学習機会の減少」（*1）による意欲の低下を指摘する声も多い。

図1 中学校での新学習指導要領全面实施までの流れ

	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
新学習指導要領実施の動き	先行実施 総則等 数学、理科			全面实施
教科書・補助教材	移行措置用「補助教材」配布	新学習指導要領準拠教科書検定	新学習指導要領準拠教科書採択	新学習指導要領準拠教科書使用開始
小学校との接続		小学校6年生で移行措置を経験した新入生が入学	小学校5年生で移行措置を経験した新入生が入学	小学校で全面实施を1年間経験した新入生が入学
高校との接続		2010年度入試(2010年1〜2月実施)について、先行実施の領域は出題範囲に含まれる	2011年度入試(2011年1〜2月実施)について、先行実施の領域は出題範囲に含まれる	新学習指導要領に対応した高校入試

*編集部作成

まずは、中学校での学習内容の変化を知り、学びの連続性を意識した学校づくりが求められる。

*1 全日本中学校長会「新しい時代に求められる学校づくりの調査研究」(2009年3月)によると、36.1%の教師が「興味・関心に応じた学習機会の減少」と捉えている。詳細は、「VIEW21」高校版2010年2月号 特集「新課程を機に現行課程を振り返る」参照
http://benesse.jp/berd/center/open/kou/view21/2010/02/02toku_10.html

中高一貫校における新課程の課題と期待は何か

■公立併設型中高一貫校

新課程は「公教育の使命」を 問い直す契機



岡山県立岡山操山中学校・高校
主幹教諭
三浦隆志 *Mira Takashi*

普通教科増を契機に 一層の基礎基本の定着を図る

中学校の新学習指導要領では、周知の通り、外国語や数学、理科を中心に学習内容が増えます。一般の中学校では、学力の底上げが期待される半面、これまで以上に成績上位層と成績下位層の二極化が進む可能性があるかと、私は考えています。中高一貫校では一般の公立中学・高校よりも生徒の学力差は少ないので、二極化も一般中学・高校よりはそれほど顕著では

ないと思います。しかし、学習内容が増えれば、学力の定着が心配される生徒が増えるのではないかと懸念されます。本校教師の間でも学力の定着をいかに図るかという声が聞かれます。

特に公立の中高一貫校では、一般の中学校に比べて、学力定着のために宿題の量が多いようです。本校の中学校でも、岡山操山高校に進学するのに十分な基礎基本やより発展的な学力定着のために、宿題の量は多めです。これから学習内容が増えれば、単純に量の問題だけにせず、宿題の内容も工夫せざるを得なくなるでしょう。高校現場に立つ身としては、中学校での学習内容の増加を生かせ

■私立併設型中高一貫校

学校教育に対する信頼感を 取り戻す機会に



佐久長聖中学・高校
中学校教頭
岩崎和彦 *Kazuhiko Iwasaki*

小学校段階からの 基礎学力育成に期待

新学習指導要領に対して、いくつか期待している点があります。

一つは、小学校で基礎学力と学習に向かう姿勢を身に付けた生徒が入ってきてくれることです。現在の学習指導要領が施行された頃から、入学してくる生徒の基礎学力と学習に向かう姿勢が気になり始めました。中学受験を突破してきた生徒ではありますが、時に驚

く程、基礎的な知識が抜け落ちて

いることがありました。

また当時は「ゆとり教育」の弊害が叫ばれ、保護者の中には「学校には頼れない」という思いを抱く方も出てきた時期でした。保護者が学校教育を軽く見てしまうこと、当然、子どもにも伝わります。

「勉強は塾や家庭教師で、学校は友だちと一緒に過ごす場所」という意識が、以前よりも子どもの中に根づいてしまっているように思います。

小学校で授業としつかり向き合っただけの子どもが、中学校に入学して急に授業に集中できないようにはなりません。本校においても、生徒が授業を大事にしていないという雰囲気を感じられた

るよう、中高で連携して、教科指導の枠組みを考える必要があると感じています。中学校での学習内容の変更を熟知しなければ、高校に入学した生徒の変化に対応できません。新課程により、中高接続の重要性が一層高まるでしょう。

更に生徒の自立した学びが実現できなければ、学習内容の増加には対応しきれません。中学校段階でいかに学びに向かう姿勢を育めるかが、新課程の狙いを実現する上で大きな鍵になると思います。

選択教科の縮小で 学校の特色化を見直す

公立中高一貫校の本校にとって大きな問題になるのは、選択教科の縮小(*2)です。本校は教育目標の一つに、「主体的に学び、考え、個性や才能を最大限に伸ばす教育の実現」を掲げています。そのため、「レクチャー」「クリエイト」「チャレンジ」という独自の選択教科と学校独自教科の「コミュニケーション」を設け、それが特色の一つにもなっています。

「レクチャー」では、高校の教師が中学の教師とのTT(チーム・ティーチング)により、教科書を離れた内容の授業を行っています。例えば、私の担当教科の社会では、裁判員制度に合わせて模擬裁判を行ったり、選挙演説やマニフェストを作成し、選挙活動を疑似体験したりしました。高校から大学、社会へとつながる高度な内容の一端を紹介することで、中学生の教科への関心と、高校での学びへの期待感を高める効果があります。高校の教師にとっても、中学生から新鮮な刺激が得られると共に、中学生の実態を把握する良い機会になっています。

「クリエイト」では、音楽や体育などの創造的・生産的な内容を選択し、「チャレンジ」では、五教科に関する発展的な内容、補足的な内容に取り組みます。

学校独自教科の「コミュニケーション」は、その名の通り、「聞く・話す・書く」を通じてコミュニケーション能力を育成する教科です。ディベートや弁論の仕方、英語のスピーチ、プレゼンテーション用

時期がありました。

本校では、学校の授業が基本であることを、入学前オリエンテーションの段階から生徒に意識づけています。新課程となり授業時数が増えることで、基礎学力が定着し、学校に対する保護者の学習面での期待が高まり、小学校段階から授業で学びに向かう姿勢を培うことが出来れば、中学校・高校において、学校の学習により前向きに取り組める生徒を育てていけるのではないかと考えています。

言語活動の充実を通して 人の話を聞く力を身に付ける

新課程でもう一つ期待する点は、考えて表現するという言語活動の充実を重視していることです。きちんと人の話を聞き、自分の考えを述べられる生徒が増えれば、学習の理解も深まり、授業やクラス活動も活発になるでしょう。

私は、現行課程になって、話を聞く力が弱い生徒が増えたと感じていました。例えば、学年集会や

HRなどで、教師がその場の生徒全員に対して話したことは、基本的に生徒一人ひとりに聞いてほしいと思って話していることです。ところが、7、8年くらい前から、それが自分に向けて話されていると認識しない生徒が増えたように感じます。授業や学活などで教師が話したことを、聞き直しにくる生徒が多くなったと、一時、本校で問題になりました。

これは私の考えですが、塾に通う子どもが増えたことや、小学校でも少人数のグループになって授業を受ける機会が多くなったため、30〜35人の集団に対して言われたことが、自分のことであるという認識を持ちにくくなっていくのではないのでしょうか。

人の話が聞けないということ、授業を受ける態勢が出来ていないことと同じであり、それは学習において大きな障害になります。本校ではこのことを重要な課題と捉え、中学校入試で課す作文の方法を変えました。従来の作文は課題に対して400字で記述する形でしたが、話が聞ける生徒に

*2 選択教科は標準授業時数内ではなく、設ける場合は枠外での設定となる

図2 岡山操山中学校・高校 中高接続の指導の工夫

●中学から高校への接続を円滑に行うための取り組み

- ・中高一貫教育推進室による教育活動の支援
- ・カリキュラム構想委員会を設けて中高一貫で授業研究
- ・「集団作り」を意識した特別活動

●基本教科の徹底

高校	<ul style="list-style-type: none"> ・数学、英語、国語の一部で標準・速修の速度別授業 ・数学、英語における少人数指導
中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・数学、英語での少人数指導とチーム・ティーチング ・高校の授業見学と学習ガイダンス

●個性や才能を伸ばすための選択教科・科目の開設

高校	<ul style="list-style-type: none"> ・進路希望に応じた科目選択 ・進路希望の実現を目指す多くの学校設定科目(数学概論Σなど)
中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・「レクチャー」：国語、社会、数学、理科、英語から選択(中高の教師による協同授業) ・「クリエイト」：国語(書写)、音楽、美術、保健体育、技術・家庭から選択 ・「チャレンジ」：国語、社会、数学、理科、英語から選択 ・「コミュニケーション」：「聞く、話す、書く」などの指導を通じてコミュニケーション能力を育成

*学校資料を基に編集部で作成

ソフトの使い方やホームページ作成だけでなく、日本や世界各国の伝統や文化、社会問題等の学習を通じて、社会で役立つ力の習得を目指しています。

いずれの教科・科目も、個性や才能を伸ばすという本校の教育目標を実現するためには重要な取り組みですが、新課程への移行を契機に見直す必要が出てくるかもしれません。現段階では、6時間目の下に7時間目を設けて対応するなどの方法を検討しています。

新課程が目指す「生きる力」の育成と、本校が養いたいと思っている「社会人としての基礎的な力」の方向性は同じです。新課程を公教育の使命を問いつつ機会と捉え、自校が目指す生徒像を再形成していきたいと思えます。

公教育では社会を担う人材を育成すべきだと、私は思います。知識だけにとどまらない社会に求められる力の育成を、6年一貫のグランドデザインの見直しでより一層、深化できると考えています。

図3 佐久長聖中学・高校 中高接続の指導の工夫

●中学から高校へつなげるために授業の中で重視していること

- ① 中高の両方を教えた経験のある教師が、先を見通した指導を行う
- ② 教師の話聞くだけでなく、生徒が自ら考え、発言する授業の実施
- ③ 3分前着席で「ものと心の準備」をする
- ④ 家庭学習を、授業を効率的にするためのものと位置づける(「予習→授業→復習」のサイクルを確立させる)
- ⑤ 学習内容を削減せずに、基礎基本の定着を徹底する

●中3と高1の接続を重視した指導

高校1年	<ul style="list-style-type: none"> ・高校キャンパスへ移動し、入学進級式を実施。中だるみを防ぐ ・外進生との交流などで、心の切磋琢磨をする力を養う ・生徒の幅広い学力に応じて完全習熟度別授業で伸ばす ・教科書・問題集の反復学習を重視 ・大学進学を視野に入れた指導を実施、新たな目標に向かわせる
中学3年	<ul style="list-style-type: none"> ・1、2年生はクラス替えをせず、3年生でクラス替えを実施。中だるみを防ぎ、新たな仲間とクラス活動に臨ませる ・2学期途中より習熟度別授業導入 ・高校の教育課程に入る ・家庭学習を予習中心にシフト ・中学校での最高学年として自覚と責任を持たせる

*学校資料を基に編集部で作成

入学してほしいというメッセージを込め、それを日本語の文章を聞いて、要約や解答をする問題に変えました。3、4分程度の放送を流し、その内容について問うことで、聞く態度、聞き取りの力を見るのです。

また、本校では入学すると最低1年間は寮生活を体験させます。自分のことは自分で出来る、自立した人間になるという目的がありますが、それだけではなく「人間関係力」ともいえる力が付くこと

も特徴です。人に言われたことを理解し、自分が主張すべきことを言わなければ、良好な日常生活は送れません。

新課程からは、子どもの学力や生きる力を高めたいというメッセージが十分に伝わってきます。新課程によってどの程度、子どもの実態が変化するのか。しっかりと把握し、指導を見直すと共に、学校教育に対する生徒や保護者の信頼を取り戻すきっかけになることを期待しています。